

# 私の『まんじ』百号記念 我が父・新井稔

新井 宏

今回の一七四号は私にとって『まんじ』百号記念号である。

平成十一年末の「史遊会」飲み会の席上であったと思う。畏友鯨游海さんから『まんじ』に加入するようになり強く求められた。当方に弱みがあったのは、翌年から韓国国立慶尚大学に行くことが内定していて、史遊会の運営からある程度手を抜かざるを得ない事情があり、その後を鯨さんが黙って引き受けてくれたことがあったからである。ノルマは三ヶ月に一回六頁ほどの小稿を提出すればよいことである。

その頃、鯨さんは三戸岡さんから『まんじ』の編集長を引き継いでいて、会を纏めて行くのに苦労しているのを知っていた。お酒の勢いもあって「まあ、何とかなるだろう」と引き受けた。原稿提出は翌年平成十二年二月の七五号からである。

あった。もちろん、会の運営に参与するように求められているのを感じながら、いつも知らぬふりをして過ごしていた。

それにもかかわらず、我が人生『まんじ』から得た恩恵は莫大であった。それは、研究分野の専門的な学会から学んだことよりもはるかに大きなものがあつたように思う。

さて、その『まんじ』の私的な百号目、何を書こうか迷っていた。最初は、百号分の原稿から各号何か気の利いた表現を数行ずつピックアップしてみようと思った。しかしあまりにもお座なりである。だからと言って、いままでも努力しても書けなかった「小説」に取り組んでも苦しむのは目に見えている。結局、従来のパターンから何かを選ぶしかない。

そうだ。このところ、年上の親友とか恩人のことを続けて書いている。杉本正勝さん、大和岩雄さん、安本美典さん、そして水野誠さん等である。

我が父・新井稔について、僅かしかない記憶を辿って纏めて見るのも親孝行かも知れない。事実、父については、私の自伝風のエッセイの中に断片的に登場するが、まとめて書いたことがない。

理由は判っている。オーバーに言えば私が父と一緒に生活したのは、私が中学生になる頃からで、それまでは、

本号一七四号で丁度百号目、新参者がいつのまにか、三戸岡さんを除けば最長会員となってしまった。誘ってくれた鯨さんも「眼の衰え」で漢和辞典を引くのも困難になり、五二号の漢詩潮唄録(1)から一六一号の潮汐録(102)すなわち通算百十号まで一度の休載もなく過ごして退会された。

入会の事情から、まさか二十五年百号まで続くとは思わなかったのだ、会の活動とか運営には消極的で、なんとか自らの役割を務めればそれで「良し」とする態度であつた。

だから「史遊会」の関係者は別として、私の学校関係とか職場関係とか、学会関係の仲間を勧誘することにはなかった。そのため折角、各号十部宛ての配布があつたにも拘わらず、友人関係への送付は全く実施せず、時折、同人誌等を送って下さる方への返礼用に利用する程度で

我が家は実質的に母子家庭で、父ははるかに遠い存在であつた。すなわち、三度の徴兵召集、一度の海外単身赴任の他に戦争による家族の長期の疎開生活が父との同居を阻害していた。

例示すると、昭和四年の徴兵検査に続く現役召集(約一年間)、昭和六年の満州事変召集(約一年間)、昭和十二年の盧溝橋事変召集(約一年間)、昭和十六年の「南興水産」のトラック島勤務(約三年間)、昭和二十年の北支召集(約一年)、昭和二十年の家族の縁故疎開(約四年間)という具合である。それらの父の不在期間中には、職場や住居の変更を伴う場合が多く、父の正確な年表を作成するのが困難な場合が多い。

その中でも特に大きな問題は、父が大学付属の専門学校(夜間部)に通っていたことは判っているが、何時どの大学の大学付属専門学校に通ったのかさえ疑点があつたことや、父がしばしば語っていた「自分が中村不折書道博物館を建てたのだ」いう言葉の内容も確認できない状況があつた。

時あたかも東京都知事選挙で小池百合子候補の学歴詐称問題が再燃している。父のことを書くに当たっては、疑点を晴らすことで親孝行ができるのではないか。

そのほかにも、父の生涯を振り返ると、よくぞ家族を守ってくれたと思うがある。四度の徴兵、戦禍の最中の「南興水産」の勤務など、僅かな幸運のもとで無事に

生還してくれたことに、改めて感謝したい。それが本稿の目的である。

## 一、出生から専門学校建築科(夜間)卒業まで

父の新井稔は、生糸商「新橋屋六兵衛」を経営する新井孫七(慶応三年生)と新井トセ(明治元年生)の三男として明治四十二年、現長岡市片田町に生まれた。実際には兄弟三人、姉妹六人の八番目で、父孫七(四十二歳)の時の子である。

新井家の家系図については、『まんじ』一六四号「新井家のルーツ探索」に仮説ではあるが詳しく述べた。もともと何も伝承のない中、祖先が長岡藩牧野家の中堅士族であったことを見出して書いたものである。

要は牧野家初代の牧野忠成が元和四年(1618)に長岡藩へ転封された時に付き従ってきた荒井(新井)六兵衛(三百石)以来、数系列に分かれて続いた「新井家」で、藩主の「許し」を受けて「六兵衛」を名乗る者が幕末まで宗家の役割を担っていた。

そもそも「新井六兵衛」の歴史から、平民が「新橋屋六兵衛」を勝手に名乗るはずがないとの推測から長岡藩の歴史を追いかけて、確証がある訳ではないが、その蓋然性を見出したのである。

父・新井稔が四才の時、祖父・新井孫七が亡くなっている。死の前日、村の知人を訪ねていたとの話があり、

がら、専門学校に入学するための勉強の機会を与えられていたことである。

その父が専門学校の受験勉強に使った数学の教科書が疎開先に残っていた。高等小学校出でいきなり専門学校レベルの教育を受けるのは厳しかったに違いない。ただ、その当時、似た環境にあった夜学生達のために、実に判りやすい参考書が使われていた。私は小学校五年生の頃、父の遺したルビ入りの参考書を夢中になって読んだ。その結果、鶴亀算などの連立方程式を行列式で解く方法を知った。行列式は今でも高校では教えない。また父の計算尺を使うと「九九」を覚えずに掛け算ができることも知った。だから今でも六×九〇五十四は言えるが、逆の九×六〇五十四は覚えられない。

父が日本大学専門学校建築科に通っていたということを知ったのは、中学校二、三年生の頃である。中学校の家庭調査に父親の経歴等を書く欄があり、父に直接聞いたのか母から聞いたのか定かではないが、そう記入したのを覚えている。当時の新制中学校で父親が夜学とは言え、高等教育を受けていたことを知り、誇らしく感じていた。そんな記憶があつて、父が亡くなって遺産相続書類を作った時にも、被相続人の略歴欄にも日大専門学校卒と記入した。

しかし日本大学専門学校建築科と書くのに若干のためらいがあつた。もしかしたら学歴詐称とまではいわない

家業の生糸取引で損失を出したように言われていた。事実、跡取りの長男・新井長平はまだ十三歳、家業が大変なことになったのは想像に難くない。結局、新井長平が成人する頃、片田村から愛知県岡崎市に転居している。いわば「夜逃げ」同然だったらしい。

父も高等小学校を卒業して間もなく村の大工に弟子入りしたという。修行中に、村の神社の曲線屋根材を真っ直ぐに切つてしまえらう怒られたという話を、しばしば聞いた。

そんなことがあつてか、何歳の時かわからないが、同郷の大工棟梁の岩村家を頼って上京したらしい。

私が中学生になった頃、新井家と岩村家は親戚付き合いをしていて、岩村家の子供達とも知り合つた。岩村家長男の岩村一郎さんは私より十歳年上で東大を出て朝日麦酒に入り常務まで務めた。私が日本金属工業の本社に勤務していた時、仕事で朝日麦酒本社を訪れ、取締役総務部長をしていた岩村一郎氏に面会して、昔話をしたことを覚えている。

長女のふみさんは評判の美人で、私の友達に写真をみせると、女優さんのブロマイドだといって信用してくれなかった。次男の敏雄さんは、岩村家の家業の影響が建築の構造力学の専門家になっていた。私の知る父は岩村家の子供達の兄貴分の雰囲気であつた。

父にとつて幸せだったのは、岩村家で大工仕事をしな

が、何かちぐはぐな思いがあつたからである。父が卒業したのは、果たして日本大学専門学校だったのだろうか。もしかしたら私の聞き間違えて、明治大学専門学校だったのではなからうか。あるいは田中角栄が卒業した中央工学校だったのではなからうか。

そんな疑問を持ったのは、父からしばしば昭和初期の有名な建築家堀口捨巳の話聞いていたからである。ル・コルビジェやブルーノ・タウトの話題が中心であつた。だから当然若き日の堀口捨巳が日大専門学校夜間部の先生をしていて、そんな高度な講義をしていたと思つていた。ところが、堀口捨巳が日本大学に関係していた事例をいくら探しても見出せない。

その反面、堀口捨巳は戦後の昭和二十四年(1949)に明治大学建築科の教授となり工学部長まで務めている。駿河台の校舎を設計したのも堀口捨巳である。日大も明大も駿河台にあり、そこに混同が見られるのではないかとの疑つたのである。しかし堀口捨巳が戦前に明治大学と関係した事例についてもいくら探しても見つからない。第一、明治大学に専門学校建築科が存在した記録も見つからないのである。

それでは父が堀口捨巳について語つたのは戦後の知識だったのだろうか。後に丹下健三、吉坂隆正、清家清らの著名な建築家との関係もしばしば語っていたが、堀口捨巳については、同じ流れで語られたことはなかった。

結局、日本大学専門学校在学中に非常勤講師等として堀口捨巳から聞いたことが、強烈な印象となっていたのでは無かるうか。

もう一つ田中角栄の卒業した中央工学校は、夜学で建築科を持ち、最も可能性が高い学校であるが、校舎が駿河台にあったという記録がなく、田中角栄が同郷の新潟県出身で中央工学校出身と言っても、父はあまり反応を示さなかった。

表1 父・新井稔の推定年表

| 年 月            | 召集等と勤務会社等    |
|----------------|--------------|
| 1929.6         | 徴兵検査甲種合格     |
| 1929.10～1930.9 | 現役召集         |
| 1930.10～1931.8 | 岩村工務店勤務      |
| 1931.9～1932.3  | 満州事変召集       |
| 1932.4～1936.3  | 高瀬工務店勤務      |
| 〃              | 夜学で日大専門学校建築科 |
| 1932～1933      | 中村不折書道図書館建設  |
| 1936.6         | 結婚           |
| 1937.6～1938.3  | 盧溝橋事変召集      |
| 1937.12        | 宏誕生          |
| 1938.4         | 銀座の設計事務所     |
| 1940.4         | 南興水産入社       |
| 1941.4～1943.10 | トラック島勤務      |
| 1941.8         | 美枝子誕生        |
| 1944.3         | 品川区馬込転居      |
| 1945.3～1945.10 | 北支召集         |
| 1945.4         | 長岡市高嶋町疎開     |
| 1945.8         | 玲子誕生         |
| 1945.9         | 南興水産解散       |
| 1945.11～1949.3 | 父復員後東京に出稼ぎ   |
| 1949.4         | 品川区豊町に転居     |

「学歴詐称」などと大袈裟な話ではないが、もしかしたら日大専門学校卒というのが「私の聞き違い」だったかも知れないという思いがあったからである。その上、後に国策会社「南興水産」に入社した時に、大卒という訳ではないのに、本社のスタッフとして働いていたのも、気がかりであった。

学歴が日本大学専門学校建築科の夜間部と言うことで一段落したが、学校に通っていた時期がはっきりしない。日本大学に学籍簿でも残っていれば確認できるが、それほどムキになることもない。

ただ、日本大学に専門学校工科(土木、建築、機械、電気の各科)が付設されたのは昭和四年(1929)四月、父が二十歳の時である。その情報を知った時、父は入学の準備を始めたのでなからうか。その頃、二十歳というのは、通常の徴兵検査の年齢である。理工系の大学生には召集猶予が認められたが、専門学校生にはそんな制度的な恩典はない。しかし、大学に専門学校を付設するのは、私立大学の経営上の利点があったからだという。卒業基準は別として、入学基準は「大甘」であったようである。ついでにそつと召集猶予も匂わせていたのではなからうか。

そんな推論を続けているところに、母の兄・伯父の星野六平が父の十三回忌の時に妹の美枝子に手渡ししてくれた父の年表らしきものが出てきた。内容が六十年も前の

ことで記録にあまり信憑性がないのはすぐにわかったが、私の知らない職場や住所も出て来る。それまでに調べた結果と整合するように記述を若干修正して表1に示す。

岩村工務店に勤めていたとしても、二十歳にもなれば、丁稚奉公も終わり一人前の職人として扱われていた可能性が高い。岩村工務店でも研究熱心の父を評価していたに違いない。そこに伯父の年表が見つかり、渋谷の高瀬工務店に勤めたとか銀座の設計事務所にも勤めたとかの情報始めて知った。しかしその時期については、前に考えていた想定とは整合性がない。

専門学校の年限はおそらく三年、昭和四年頃通学の便のため品川区の岩村工務店から渋谷区道玄坂の高瀬工務店に移り日大専門学校建築科に入学、昭和七年に卒業して、銀座の設計事務所就職したと考えるとなんとか整合性がとれる。

それは「父が中村不折の書道博物館を建てた」としばしば云っていて、その時期が昭和七年から八年と分かっているからである。常識的な推論では、「書道博物館」の建設に係る前に専門学校を卒業しているはずなので、高瀬工務店に移り夜学に通い始めた時期を昭和四年としなければならなくなる。

ところが、徴兵検査甲種合格による昭和四年の「現役召集」と昭和六年の「満州事変の召集」が、その推論の前に立ちはだかる。

「書道博物館」の建設に係わったのは、単に大工職人として参加しただけだったのであろうか。それでは父が熱心に「中村不折」のことを語っていたことと整合しない。

そこで思い付いたのは、父が高瀬工務店勤務中すなわち日大専門学校の夜学に通いながら「中村不折書道博物館」の建設現場責任者を務めていたのではないかと云う推論である。表1はその推論に基づいて作成したものである。

もし建設中に難しい問題が生じた場合、夜学の先生から指導を受けたこともあったであろう。そもそも永年世話になっていた岩村工務店から高瀬工務店に替わったのは、夜学に通いながら「書道博物館」の現場監督をすることが条件であったようにも思える。

## 二、中村不折書道博物館

父が書道博物館を作ったことは何回も聞いていて間違いないが、関与の仕方が、設計者としてか、施工者としてか、あるいは現場職人としてか判然としなかった。書道博物館を訪ねて、現物を確認して、話を聞けば判るかとは思ったが、父の誇りを傷つけるかも知れないと思うと躊躇していた。

しかも書道博物館のある台東区根岸は昭和二十年の下町大空襲で全滅した地域、父の造った建物も全て焼失してしまったと思いこんでいた。現在の書道博物館をイン

ターネットで調べると、武骨な鉄筋コンクリート造りに見える。「書道」の語感から、「美しい草書体」の軸装作品を想像して、建物としては「和風の数寄屋造り」が相応しいと勝手に思い込んでいたので、その鉄筋コンクリートの建物は、戦後の再建築だと思ってしまった。

しかし本稿を書き始めて、念のために書道博物館を訪問して、情報を整理しておこうと思いついた。父の新しい側面が確認できるかも知れない。

書道博物館は正岡子規の二十坪ほどの旧邸「子規庵」の真ん前にある。「子規庵」のブロック塀にかけられた台東区の「説明文」を見ると昭和二十年の空襲で焼失した建物を昭和二十八年に旧規と通りに復元したとある。

書道博物館も所蔵していた美しい軸装品類を当然「お蔵」に保存されていたはずなので、戦後それらを新築した鉄筋コンクリートの建物に展示したのであるかと思いつながら、「台東区書道博物館」に入る。

「中村不折書道博物館」は昭和十一年開館以来約六十年にわたって中村家の手で維持・保存されてきたが、平成七年土地建物共に台東区に寄贈され、平成十二年に再開館したのが現在の「台東区立書道博物館」だという。

まず、受付で参考になりそうな書籍を数冊購入して、そのついで開館当時の「お蔵」等の建物がどこに残っていますかと質問する。

吃驚した。案内書に「本館」とある建物が当初の建物

と台東区が建てた記念館の事務所が並んでいるが、新しい記念館の方は雨水で汚れ壁にひび割れが目立っているが、旧本館部分の方が豪壮で立派に見える。

後に調べたことであるが、本館の建物は台東区所管となったときに、採光や通路の安全性等を改善する必要があり、改装計画を立てたが、建物全体が東京都の史跡に指定されていて、ほとんど手を加えることが出来なかったという。史蹟であれば設計者や施工者も判明しているだろうと質問したが、全く記録はないのと。

建物の価値は東京空襲の際に戦前の建物として焼け残った珍しい例として指定されたのであろうか。それはそれで美術的な価値ではなくとも、歴史的な建造物として十分な価値がある。父が知ったら喜ぶと思った。

受付で求めた中村不折の自伝『私の歩いた道』に大正四年に雑誌『土地と家屋』に収録された中村不折邸の平面図と庭園が出ています。廊下を巡らせた居住

中村不折氏邸宅平面図並に庭園

庭園の図は不折氏の図

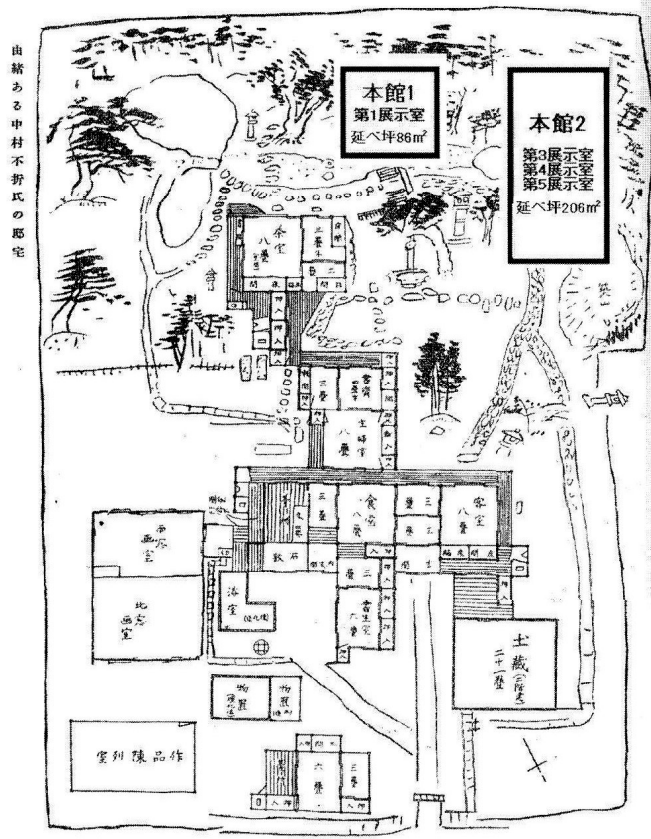


図1 中村不折邸と書道博物館の位置関係

だという。父が造ったという建物が残っているというのだ。現「台東区書道博物館」は「中村不折記念館」と「本館」とで構成され、「記念館」には碑拓法帖、経卷文書、文人法書等の類や不折の作品等を展示していて、面積的には「本館」の数倍ある。見学コースは「記念館」が先で、当初の所蔵品は全て「本館」にあると言うので「記念館」は大急ぎで通り抜け、二階建て二棟が連結された「本館」に急ぐ。

本館一号館の一階は第一展示室、二階の第二展示室は現在使われていない。床面積で二十六坪ほどである。

本館二号館が本格的な展示場になっていて、一階に第三展示室、二階に第四展示室と第五展示室がある。床面積が六十八坪ほどで、中村不折が収集した殷代の甲骨、青銅器、玉器、鏡鑑、瓦当、埴、陶瓶、封泥、璽印、石経、墓券、仏像、碑碣、墓誌、文房具、碑拓法帖、経卷文書、文人法書、など、重要文化財十二点、重要美術品五点を含む東洋美術史上重要な文化財が展示されている。青銅器や仏像、石碑などに大型品も多く、とても数寄屋建築の建物などに収納できるものではない。第一貴重な文化財が多く、保存のため耐震、耐火の建物が必要としたのはすぐ理解できた。鉄筋コンクリート造りの主柱は五十センチ角ほどある。鉄格子で守られたガラス窓付近の壁厚も二十センチはありそうだ。とにかく武骨ではあるが立派な建物である。入口から見ると、本館一号館

部分や茶室等で六十坪、画室(二十五坪)、作品陳列室十坪、土蔵十坪、その他を含めて総建坪は百坪以上、敷地が六百坪ほどの大邸宅である。現在の博物館と隣接するメゾン中村を加えた地形と面積がほぼ一致しているので、大正四年の平面図に新規の「本館」部分を記入して図1に示す。

中村邸の茶室から見渡せる庭園部分に「本館」が造られており、父も建設工事中に中村不折と並んで座って、コルビジェやブルーノ・タウトのことを話したこともあったのであろうかと思う。

### 三、中村不折の自伝

中村不折については、中学生の頃から聞いていたが、書道の大先生くらいにしか思っていなかった。しかし学べば学ぶほどの大人物である。しかも、中村不折について知れば知るほど、何か父と重なる思いがする。本稿は父について書いていて、中村不折について書くのは、不釣り合いであるが、気ままに書ける「まんじ」なのでお許し頂きたい。

私に改めて紹介するような資格はないが、中村不折の自伝や紹介書から簡単に纏めて示す。

まずは自伝『僕の歩いた道』からの抜萃。

生まれたのは明治より二年前、……江戸の京橋の濠端の家で育てられた。……僕の父は……東湊町の書記を勤めていた。

小さい時の記憶をたどって見ると、僕はやっぱり画が好きだった。

僕が五つになると、維新の騒ぎで、父が今までやってきた書役も要らなくなり……田舎に帰ることになった。……国に帰ってからは暫らく高遠に居た。……藩の学校

は、よく出来る方に指さされた

……やがて僕は……飯田の学校に転じることになり、そこでは絵画と数学を教えることになった。その時僕の教えた生徒の中に死んだ菱田春草君がいた。

飯田に居る時のある夏……河野次郎という師範学校の先生に絵を学んだ。

「君、田舎に居ては駄目だ、東京に出て勉強したまえ」東京にでようと決心した。その前から僕の耳は少しずつ遠くなって来た。高等な数学をやるには語学が出来なければ駄目なので、耳が悪いと言うことは……何よりの障害……(数学の方は)断然と思いつて(絵画を選び)急に気が軽くなった。

明治十九年に、東京では、内国勸業博覧会が開かれ、絵画部に西洋画も出品された……十一会の出品が最も異彩をはなっていると思った。十一会というのは、小山正太郎先生、浅井忠先生外九人の会……。

翌くる二十年の或る日、時事新報を見ると、十一会で研究生を募集する広告が出ていた。……即日辞表を出して、直ちに上京の準備にとりかかった。……六日の旅寝を重ねて、目ざす東京の土を踏んだ。僕はその足で団子坂の小山正太郎先生のお宅を訪ねた。研究生募集の広告に応じたものは、ただ僕一人だけだった。

同郷人のうちに、高橋是清さんの所に馬丁をしている人のあるのを思い出した。……馬丁の住んでいる所は本

があつて進徳館と呼ばれていた。……僕は「大学」を全部暗証出来たというので、先生から非常に誉められたことがあった。

二・三年して、父母と共に伊那町に移った。そこで始めて小学校に入った。……伊那町で五・六年過ぎて、今度は両親と共に松本に移ることとなった。……父は代書人(今の弁護士)になって松本の裁判所に通っていた。父母は僕を商人に仕立てるつもりで松本の或商家へ奉公に出した。

……僕は十五・六歳になった。どうしても商売人になるのは厭だと思った。何とかして智識的な方面に運命を開拓したい。……隣家の宮坂という本屋の店先へ行つて本を借りて読み耽けた。……僕は猛烈なマラリヤ熱に冒されてしまい……松本の父母の許に帰ることになった。……町には漢学の塾があった。北原という先生が漢学の傍ら数学を教えていた。

僕は十七になった。高遠小学校で助教員が要るという話をきいて……試験のようなものを受けて見たところが、首尾良く合格したので、その日から助教員となった。……小学教師となつてからは専ら学問することが出来た。……殊に好きな数学と絵画については一生懸命だった。……数学は、代数から幾何、三角まで独習した。むずかしい問題にぶつかると、三日も四日も、解けるまで考え抜くという癖があった。……その頃の上伊那地方で

邸の他に一棟をなしていて、その入口に三畳の間が空いている。高橋さんに頼んで見ると「そういうことならつかつてもいい、まア勉強したまえ」という。

明治二十六年になった。……黒木氏は歴史の書物を書いたので、挿絵を描いてくれろ、と言われたので、それを描いた。黒木氏は欽堂と言う雅号を持ち、詩文が非常にうまかった。……大正十二年に、亡くなられるまで、親密の交り続けた。

翌年になると、日清戦争が始まる。

「小日本」の編集長は正岡子規君で……新聞に絵を入れる計画が企てられ、……浅井忠先生に相談をかけた。その結果として僕は「小日本」へ挿画を描くことになった。……昨今、岡本一平君などのやっている仕事はいわば僕が元祖なのである。

中村不折の青年期までの自叙伝をながたと抜き書きした。不折自ら語る自叙伝を示したかったからであるが、そこには後年の業績につながる特徴が見られる。

総じて、人脈をつくる天才であった。そして圧巻は正岡子規との交流である。その成果を例示する。

文芸誌への挿絵

夏目漱石『吾輩は猫である』

島崎藤村『若菜集』『落梅集』『一葉舟』

月刊誌『ホトトギス』、『太陽』、『帝国文学』、『新小説』  
墓石題字

森鷗外墓、荻原祿山墓、中村彝墓、伊藤左千夫墓  
渡仏時の支援

留学のため、挿絵の収入等の節約に励みやつと三年間の留学資金を整え、フランスにむかった。しかし国内に遺す家族のことは最大の心配事であった。その際、当時の大手出版社の博文堂社長大橋新太郎が万一の時のことはまかせておけと支援を申し出た。

フランス留学準備

先に留学していた浅井忠の支援は大きかった。浅井は工部技術学校のイタリア人フォンタネージから印象派の詩的自然主義を学び梅原龍三郎や安井曾太郎を育てた。両名は私達の世代の教科書で日本を代表する洋画家と紹介されていた。

ながながと中村不折についてふれた。もともと書家としかり理解していなかった不折が調べている内にどんどん私の中で大きな存在となったのは、おそらく父との比較があったからであろう。父は数学が好きで、習字を一生の趣味としていた。

#### 四、盧溝橋事件召集と「南興水産」勤務

私が生まれた昭和十二年十二月には、父は盧溝橋事件

(十二年七月)で召集されており、次いで南京事件(十二年十二月)で衛生兵として中国にいた。復員してきたのは昭和十三年夏頃だったようである。

前に『まんじ』一六六号で「呼び名呼称と敬称」を書いた時に、私が生まれる寸前に、戦地の父から手紙があつて、命名のことで、「宏」はよいが「博」はだめ、もし博士になったら困るから、「助」もだめ、もし教授になったら困るからと書いてあつたという。

後年、父が亡くなる直前に、私は工学博士になり、父はとても喜んでいたという。私が、韓国の大学の教授になったときには、既に父はこの世にいなかった。

応召した時、父は渋谷の道玄坂で新井工務店を経営していたが、やむを得ず店をたたみ、結婚したての母は郷里の現長岡市高島町の実家に引き上げた。

そんな事情で南京事件を経て復員したころには、父は失業状態にあつたと思われ、それが銀座の設計事務所勤務となり、更には昭和十四年頃、「南興水産」に入社することにつながった。経過は全く聞いてない。

幼時の頃の最初の記憶は三歳になる数ヶ月前、昭和十四年の秋であつたと思う。住んでいた家の間取りが判るが、父の記憶はまったくない。

父が入社した「南興水産」は昭和十年サイパン島に本拠地を置いた製糖会社・南興興発株式会社と焼津の南興水産企業組合の合意により資本金百二十万円のカツオ漁

業と鯉節製造業ならびに製氷冷蔵業を目的とした会社である。

この会社に昭和十一年国策会社・南洋拓殖株式会社が資本参加することを決め、昭和十二年資本金を二百五十万円、昭和十四年五百万円と増資し、パラオに鮪缶詰工場をつくり米国向け鮪油漬缶詰の輸出を開始した。それと同時に冷凍鮪の対米直輸出を計画、その実施のため昭和十六年資本金を一千万円に、更に最終的には二千万円に増資している。

父は「南興水産」に入社してから一年ほどたった昭和十五年末に、トラツク島に赴任した。妹の美枝子の誕生日十六年八月からの推測である。横浜港から大きな船に乗って出港するのをかなり鮮明に覚えている。私が丁度三歳になる頃であつた。

「南興水産」の本社は神田小川町すなわち日本大学駿河台校舎から五百メートルほどの距離にあり、かつて父が通った日本大学専門学校と何らかの関係があつたかも知れない。

専門学校卒しかも夜学卒の学歴でありながら、国策会社で大卒に準じる処遇を受けていたようであり、既に書いたように、学歴詐称のようなことでもあつたと疑っていたが、中村不折書道博物館の鉄筋コンクリート建設の実績あるいは銀座の設計事務所勤務を評価してもらったのかも知れない。

入社後間もなくと思われる袋田の滝への社員旅行の写真が残っている。その写真に「南興水産」の実務面の責任者の庵原市蔵専務も写っている。東京工大の出身で父に目をかけてくれた方だと聞いている。私が東京工大に入社した時に父からそんな話を聞いた。いずれにしても本社のスタッフはかなり少人数だったように思える。

「南興水産」から派遣されたのはトラツク島と云うが、正確にはトラツク諸島(現在はチューク諸島)のことで、周囲二百キロメートルに及ぶ世界最大級の堡礁・チューク環礁の中に二百四十八の島々が存在する。その中でも比較的大きな島には春島、夏島、秋島、冬島など日本式の名前が付けられていたが、トラツク営業所は夏島に置かれていた。

「南興水産」の昭和十六年当時の概要については川上善九郎『南興水産の足跡』に比較的に詳しく記録されている。

資本金 一〇〇〇万円

従業員 一三〇〇名

基地 パラオ営業所(所長 常務取締役 上野省三)

トラツク営業所(所長 取締役 吉田春吉)

サイパン営業所(所長 鈴木 榮)

ポナペ営業所(所長 大和田利雄)

クサイ事務所(建設中 主任 山本忠一)

各基地の責任者の名前を記したのは、その最後に出て

来る山本忠一の名前を知っているからである。戦後、父母は品川区西小山に住む山本家と親密な付き合いを続けていた。どうやら、父はトラック基地に所属しながら、基地建設中のクサイ島に派遣され、所長代理格の山本忠一さんの家に長期間寄宿していたらしい。

クサイ島に冷凍倉庫を建設するのが父の任務であったと思われる。各基地に設置された冷凍倉庫の規模は容量で四百トン規模、床面積で五〇〇㎡ほどであり、それと同等な冷凍倉庫の建設の担当者であったのだろう。建築全般に通じていた父はクサイ島でも事務所等の建設も担当していたと思われる。

単身赴任の父は衣食住で何かと山本忠一と奥さんに世話になっていたと云い、戦後経済的には恵まれなかった山本家に相應の支援をしていたらしい。戦後三十年以上もたった昭和六十二年に父が亡くなった時には山本さんの奥さんが葬儀に見えていた。

父がトラック島から帰任したのは昭和十八年末の頃である。帰国がもう数ヶ月遅れていたら、多くの輸送船が米軍の潜水艦の攻撃を受けて沈没していた。幸運だったのは、昭和十八年九月三十日御前会議で「絶対国防圏」が決定されたことである。

太平洋戦争当初の戦いで、(米)フィリピン、(英)マレー半島・シンガポール、(蘭)インドネシアを簡単に制圧した日本軍もこの頃になると昭和十七年六月ミッドウェー

本土送還されたからであった。

父は帰還しても母子が寄宿していた台東区亀戸の母の兄の家と一緒に住むには狭すぎた。急いで品川区西馬込に一軒家を確保し、母子と一緒に住むようになったのは私が馬込第三国民学校に入学する直前である。洋風の書斎のついた家で、庭も付いていた。

庭には頑丈な防空壕を造った。何故か家の前の道路にも防空壕が造られていた。超高空をB29が飛んでいるのを見たが、無邪気に定型化された飛行機の絵を盛んに描いていた。

そして昭和二十年の二月頃、父に四度目の召集令状が届いた。知り合いのハイヤー運転手が設営場所まで送ってくれたのに同乗したが、門衛が将官でも乗っているのかと敬礼をしてくれた。

それからまもなく、三月十日の東京大空襲があり、当日の夕方になると東京中央部の上空が薄赤くなっていたのを記憶している。その日未明から始まった大空襲は夕方には鎮火したはずなのにどうしたことか私には判らない。

我が家の母子家庭は馬込に住んでいて空襲から免れたが、一年前に居候していた亀戸は被害の大きな地区であった。幸い伯父の家族は現長岡市の釜沢と云うところに疎開していて助かった。

父が二度目の出征で、私が二年生になる直前、母の実

海戦で大敗し、八月米軍がガダルカナル島に上陸、翌十八年四月山本連合艦隊司令長官戦死、五月アッツ島の「玉碎」などと守勢にまわり、本土防衛のために、広がった戦線を整理する必要があった。その総合対策が「絶対国防圏」の設定である。

国土防衛のために「死守」すべき地域が「絶対国防圏」であり、逆に言えば「絶対国防圏」以外は放置することもあり得ると云うことであった。

「南興水産」の基地でいえばサイパン、バラオは当然「絶対国防圏」であったが、トラック島は地域的には圏外のはずなのに、海軍の基地が有ったために特別に入った。

「国防圏」に指定された地域では、満州や北支などから陸軍が増強される一方で、非戦闘員は食料補給の負担軽減のため本土に送還されることになった。太平洋地域全体では一六、〇〇〇人ほど、トラック島からは三、二四六名が本土に送還されており父もその中の一員であったと思われる。

翌十九年二月になると、決戦のため集結していた連合艦隊の主力十五隻が既に決戦の時期を逸したとしてトラック島を離れた。その直後に米軍によるトラック島の空襲が行われ、艦艇十隻、徴用商船三十二隻が沈没、零式艦上戦闘機二百機以上が地上で破壊され、陸軍兵士や民間人も含め七千人以上の死者を出した。

父の生還は真に「絶対国防圏」にトラック島が含まれ、

家、現長岡市高山町に母子三名で疎開した。

終戦直前の八月十一日、二番目の妹の玲子が生まれた。結局、私、美枝子、玲子の三人とも、父の応召中や海外勤務中の母子家庭で生まれたわけである。

## 五、戦後の混乱期、東京への出稼ぎ

父が戦後になって復員したのは、昭和二十年の十月頃だったと思う。玲子を加え、母子四人が母の実家、現長岡市高嶋町に疎開していたが、父が同居する余裕はない。父の生まれた現長岡市片田町の長姉の家に一時落ち着いたが、間もなく東京に出稼ぎに行った。焼け野原の東京の復興が始まっており、大工の働く場所は十分にあった。おそらく岩村工務店に寄宿し日銭を稼いでいたと思う。ただし、復員した以上、母子四人を母の実家においておくわけには行かない。

片田町の長姉の家は旧新井家の屋敷内にあり、駄菓子屋をやりながら、村の集会場の役割も果たしていた。おそらく長男が夜逃げ同然で岡崎に移住した後、生糸商の新橋屋六兵衛の建屋を長姉が引き受けたと思われる、文久年間の建築だと聞いている。そのため建屋に多少の余裕があった。父は二階の奥の納屋を改造して母子四人の住まいを確保するとまた東京に出ていった。

疎開の身でありながら左程困窮することが無かったのは、「南興水産」の整理で退職金などが支給されたこと

や父の木工仕事による現金収入があったからと思われる。父はめったに帰らずに働いていた。だから一緒に食事をした記憶もなく、ましてや遊んでもらった記憶もない。しかし子供ながら父の働きのお陰で生活がなりたっていることはよく分かっていった。

私が小学校五年生になる頃、父は東京に小さな家をつくることを計画していた。仕送りをしながら、資金をためていたのであろう。

父には片田町に幼なじみの川上重作という方がいた。小作農兼自作農クラスの出身であるが終戦後直ちに着手された農地改革で村の農地委員を務め、地主層から強制的に買収し小作農に物価スライドなし(いわば無償)で売却する「革命」の推進に貢献した方だという。

先に見える方で、父が東京に帰還する際には、いわば父に投資する形で資金を提供してくれた。

そのことと関係するのも知れないが、その頃、父はレストラン銀座アラスカの内装工事を請け負っていた。

経営者は遠山景久という人物で、敗戦後軍隊のトラックを米軍に没収される前に横領して運送会社を興し、レストラン経営後、ラジオ関東の社長になっている。名前から連想できるように、江戸町奉行・遠山景元の末裔にあたる。

家にはレストラン銀座アラスカの竣工式の時写した職人達の五十名ほどの集合写真がある。施主の遠山景久を

て陸軍医学界の偶然とも云える人事でベニシリンが研究テーマとなった。日本は昔から発酵技術の先進国であった。湿度が低くカビの生成にくいヨーロッパに比べ、多湿の日本は醸造学で世界的な権威を輩出していた。終戦前にベニシリンの完成の直前まで研究が進んでいた。

終戦後米軍から研究を禁止されたが戦後の戦傷者や梅毒患者に対応するため、にわかに製造を急がされた。それらの偶然が、日本に三番目のベニシリン製造国をもたらした。そして我が家の「奇蹟の生還」が起きた。

伝染病専門の都立駒込病院に緊急入院させてくれたのはひとえに母のお陰であった。近所の内科医の診断に納得できず、より大きな病院を廻り、駒込病院にたどり着いたのは全て母の執念によってであった。

その頃、父の姿はみえなかったが、後で知ったのはまだ著しく高価であったベニシリンの資金調達にとび回っていたとのことであった。

翌年正月に、四番目の子、次男の繁が誕生した。私と十三歳違い、父の在宅中の出産は始めてであった。

中学生になった私が食卓で父と話をするようになったのは、その頃からである。父は新井工務店を名乗っていたが、実質は職人が数人の零細企業であった。しかし、ほとんどの仕事が設計者付きであり、丹下健三とか吉阪隆正と云う名前がしばしば出ていた。丹下健三が東大に「丹下研究室」を作ったのは昭和二十一年三十三歳の時、

中心に全員レストラン銀座アラスカの法被を羽織っているが、施主の隣りに父が座っている。子供心にも「父は偉いんだ」と思ったが、後に職人のほとんどが諸職で父は単に取りまとめ役だったことを知りちょっと残念な想いをした。

父がどうして銀座アラスカの工事にタッチしたのか全くわからないが、「南興水産」に勤務する前に銀座の設計事務所に勤めていたことからの紹介だったように思う。

## 六、品川区の新井工務店時代

一家疎開から帰京し品川区豊町に住んでからのことは、私も六年生になっていて、直接知っていることが増える。帰京した年の九月、私と妹の美枝子が法定伝染病の流行性脳脊髓膜炎脳膜炎にかかり、まさに死にかかっていた。助かったのは、その当時日本が世界で三番目にベニシリンの国産化に成功したことであった。そして「奇蹟の生還」を果たしたことを『まんじ』一〇四号に書いた。真に奇蹟の連鎖であった。チャールスがベニシリンによって肺炎から回復したと云う誤報からはじまり、潜水艦伊八号が敵のレーダーに捉えられ集中攻撃を受け満身創痍となり沈没寸前の姿でドイツから帰港して、機密技術資料がもたらされた。その中に「臨床週報」という雑誌があり、ベニシリンに関する最新情報が載っていた。それを陸軍軍医少佐の稲垣克彦が偶然に読んだ。そし

吉阪隆正が早稲田大学に「U研究室」を作ったのが昭和二十八年三十六歳の時であり、その頃から研究室として建築設計活動を開始している。

したがって、実際の一般住宅設計は若手の研究員が担当していたと思われるが、父は既に著名な建築家になっていた両氏にも面会していたようである。因みに両氏ともにル・コルビジェの影響を強く受けた建築家で、父は堀口捨巳に教えられたこと等売り込んでいたのかも知れない。

父が作ったと語っていた住宅建築で著名な人邸の例を次に示す。記憶がかなり曖昧なので順序は建築順とはなっていない。

山縣有朋邸(昭和二十七年の再建工事の一部)

九段の相馬藩主の後裔邸

キリンビール社長の川村音次郎邸

東京都教育長の小尾席雄邸

イスラエル大使の門田省三邸

三菱総研副社長の江森盛久邸

都立大名誉教授の三井為友邸

ドイツ大使館の内装工事

もちろんこれら外に、設計者の紹介による一般住宅も多かったと思われる。図面を正確に読めて設計者の意図を実現出来る施工者が少なかった時代であり、雑誌『新建築』とか『マイハウス設計集』などにも新井工務店の

名前で施工例が出ている。息子からみてもあまり商売が上手でなかった父は特徴のある建物をつくることに生き甲斐を感じていたのであろう。全建築をヒノキの皮むきをした丸柱で施行した例もある。

既に述べたが父は生涯「習字」を趣味としていた。正式に書道を学んだことはなかったようであるが、毎年の年賀状で字の美しさを評価しても常に一、二位には入っていた。

### 七、私は新井家の長男を志した

私は高校生になる頃から「新井家の長男」になることを決めていた。父がその時まで元気で働いていたが、その人生は何時突然の死が見舞っても不思議でなかった。もし父が亡くなっていたら新井家がどれほど厳しい世界になったか想像出来た。

母方の里、すなわち現長岡市高島町に疎開した頃から、母の長兄星野五郎松が、家を出た妹や弟達、そして自分の子供達に、もし何か困難があれば、田畑を処分してでも、長男の役割を果たしているのに、強く影響を受けていた。農家で有り田畑という資産があるからできていた面もあるが、我が父に万一のことがあれば、引き継ぐのは長男である私しかない。そして私に強い長男意識が生まれた。

大学を選ぶ時も、絶対に浪人しないで合格できるとこ

ろ、就職に有利な所、自宅から通えるところを狙った。

就職後は給料を全て母に渡し、必要経費をもらって生活した。父に何かあったら自分が家を支えるという強い自意識であった。結婚するのも三十歳近くになってからでかなり遅れた。その時、父母は貯金の全くない私に、勤務地の相模原に百坪の土地と二十五坪ほどの家を準備してくれた。木材は客先で壊した家の廃材を利用した平屋で屋根の勾配の極度に少ない家であった。外観を見ると『新建築』などの雑誌に載っている例に似ている。

家の前を通りがかった方から見学させてほしいとの申し出もあった。

私の長男意識はその後も続いているが、私が結婚した時に、末弟の繁が十六歳になっていた。もう父に何かあっても何とかなるだろう。そして家計を自立した。しかし、新井家の支所の意識であった。

父は昭和六十二年十月七十八歳で亡くなった。六歳違いの母も平成七年四月七十九歳で亡くなった。

母のメモによると「父はお勉強好き」と書いている。その母は小学校卒業後、茅ヶ崎の紡績工場に就職して実家を助けながら働いたが、一番嬉しかったことは就業後の「お勉強の時間」だったとも書いている。「母もお勉強好き」であった。

## バス 発車 (三)

三戸岡 道夫

(六)

バスの乗客は着実にふえつづけ、誰もが発車の時間に全神を集中させていた。バスの外にも、煙草を吸ったり、背のびをしたり、盛んになにか喋っている連中もいたが、いずれも、いざ発車となれば直ちにバスに駆けつけるに十分な身構えで、バスの方を伺っていた。

サファイヤの奥さまも話が一段落すると、ハンカチで鼻の先を氣ぜわしく煽きながらバスに乗ってしまった。バスのステップをのぼるとき、着物の裾からニユーツと出た白い両脚に、彼は遠目の視線を走らせ、再び彼女のオルガンテイの割れ目を憶い起した。赤鼻も腕時計の針をたしかめながら、バスへ戻っていった。

彼もバスに乗るのか乗らないのか、早くきめなければ

ならないと思った。

それで再び公衆電話へと走った。

だが課長も副部長も会議中でデスクにいなかった。「部長は?……」と聞いてみると、これも席にいないという。まるで仕事にならない……。のんきすぎるにも程がある……。彼は再び腹がたってきた。しかし相手がいないのではどうしようもない。彼はキンキンしそうな声をや々と押さえて、電話口に出てくれた男に黒いバスのことを聞いてみた。そのことならさつき課長が副部長に話をしていたが、副部長はあまり芳しい返事をしていなかったというのであった。彼のいらいらはにわかに倍加して、

「出張申請書はあがっているんでしょうか……」と聞いてみた。

「ええ、いま副部長の机の上のついていますね……」

「副部長のハンコは……?」